

# ライティング教育に向けた指導法および教材開発

## —2010年度基礎セミナー共通講義「レポート作成の基本」報告—

大学教育機能開発総合研究センター  
渡邊 淳子

### はじめに

本稿は、2010年度基礎セミナー共通講義「レポート作成の基本」において実施したアカデミック・ライティング指導の内容と今後の課題についての報告である。

本講義は、本学が2009年度より3カ年計画で取り組んでいる文部科学省補助事業(GP)「学習成果に基づく学士課程教育の体系構築」の一環として企画された。講義名が示すように、アカデミック・ライティングの中でも学生に最も身近なレポートの作成法に特化し、基本的な構成のあらましとわかりやすい文章の書き方についての指導を行った。

ここで言うレポートとは、単なる学習のまとめや文献要約といった学習レポートではなく、学生自身が問題意識を持ち、自主的に調べた事柄を報告する研究レポートを指す。研究レポートは卒業論文や卒業研究、いわゆるアカデミック・ライティングの原型をなすものと考えられる。また、基本的なレポート作成の素養は社会人にとっても必須の能力でもある。

今回の講義は、各クラス90分という短い時間の中で、構成編、文章編の2部構成で試行した。講義中、学生には今回開発したアウトラインシートを作成させ、同シートをもとに800～1000字程度の文章をつくらせた。講義終了時には講義内容等に関するアンケートを実施した。アウトラインシート、作成文章およびアンケートの各提出物からは、学生のライティングに対する苦手意識と不安感の高さがくみとれる一方で、早期の基礎的教育を渴望する声も高かった。

### 1. 背景

アカデミック・ライティング指導は一種の言語技術指導である。レポートや論文では、自らの研究結果や主張を十分な根拠を示して正確に伝えなくてはならない。文章が論理的であるかどうかは、根拠となる事実を順序良く丹念に組み立てているかどうかということにかかっている。わが国でも中学、高校では学習指導要領において「根拠を明らかにし、論理の展開を工夫して書くこと」や「論理的な構成を工夫」することが求められている。ただ、現実には日本の国語教育が心情の伝達を専らとする「文学教育」が主流であるとする指摘がある。すなわち、事実と意見を峻別する基本的な訓練がなされておらず、その結果、情報を正確に伝え、意見を理路整然と述べる力が育っていないといった批判である(木下, 1994, 33-35)。実際のところ学生たちのライティング能力の低下を憂える声は、多くの大学で聞かれるところである。近年は早稲田大や津田塾大など国内のいくつかの大学でライティング・センターの設置が見られるようになっている。これは、学部横断的に正課程外の指導を行い、学生のライティング能力の向上を図ろうという試みである。

ライティング・センターは、ライティング・アクロス・ザ・カリキュラム(Writing Across the Curriculum)という理念に基づき、まずアメリカの大学で広がった。ライティング能力はあらゆる学生に

必要なものであり、指導はカリキュラムの分野を超えて行われるべきであるという考え方である。1970年代から広がり、いまや同国におけるアカデミック・ライティングの指導理念ともなっている。(佐渡島, 2006)

ライティング・センターにおける指導の重点は、「書いた後」でなく、「書く前」や「書いている途中」においての評価に置かれる(North, S. M., 1984)。この指導方針は、ライティング・アクロス・ザ・カリキュラムの理念に先駆けて生まれたライティング・プロセス(Writing Process)運動に依るところが大きい(Meyer, E. & Louise, Z. S., 1987)。指導する側は会話を通じて書き手に気づきを与え、最終的には書き手の自立を促すことをめざすということである。すなわち、ライティング支援の目的は、添削によって「よい文章」にするのではなく、書き手が「よい文章」に自分の力で到達できるように、その方法を指導することにあるというわけである(佐渡島, 2008)。

本学でも本年度、ライティング・センター準備室(仮称)を設置し、センターの運営方法の検討や教材開発に取り組んでいるところである。学生に対する個別指導も行い、本年度は卒論関係の8人を含め計11人に対し延べ26回(1月13日現在)の指導セッションを持った。今回行った学部横断的なアカデミック・ライティング講義も、ライティング・センターにおけるフォローアップがあって初めて有効性を発揮しうるものである。また、大学初年次においてアカデミック・ライティングの基礎を習得することは、学生の論理的思考の習慣づけにつながるだけでなく、今後の学習に対する動機付けの大きな契機にもなると考えられる。

## 2. 講義の概要

講義は前期、後期とも、ライティング・センター準備室作成のテキスト『レポート作成の基本』をベースに行った。前期は199名を最大とした大人数を対象に行った。後期は、前期から一転し、30人前後の少人数制の講義となった。

### (1) 実施期間

前期：2010年6月10日(木)～6月18日(金)

6月10日	5限目	受講 199名
6月11日	3限目	受講 99名
	4限目	受講 129名
	5限目	受講 120名
6月17日	5限目	受講 112名
6月18日	4限目	受講 113名
		計 40クラス(772名)

後期：2010年10月22日(金)～10月28日(木)

10月22日	4限目	受講 14名
	5限目	受講 33名
10月28日	5限目	受講 38名
		計 7クラス(85名)
<hr/>		
前・後期合計 47クラス(857名)		

## (2) 講義内容

講義は各グループ1回(90分)ずつで、「文章の構成」と「わかりやすい文章」の2部構成とした。構成編終了後にアウトラインシートを作成させた。前期は文章編終了後に練習問題を解かせ、解答例を参考にしながら自分の手で修正させた。後期は講義前半で作成したアウトラインシートをもとに800～1000字程度の文章作成を課した。前期と後期の講義の流れは下表の通りである。

	前 期	後 期
導 入	これまで書いてきた作文や小論文との違いを説明した。レポートとは調査・研究、学習成果の報告である。小説、随筆など読み手の心情に訴える鑑賞文、あるいは日記、感想文、作文といった情緒的な文と違い、事実と意見をきちんと区別した実用文である。(約7分)	書くことは考える作業、ライティングスキル向上の重要性など、書くことへの動機づけを行った。(約7分)
構 成	レポートの基本的な構成を説明した。 ・序論・本論・結論 ・表題はより具体的に ・引用、参考文献のマナー (約25分)	アウトラインシートの各部分の説明を行い、レポートや論文の組み立て方の基本を教えた。この際、アウトラインシートのサンプルも提示した。(約25分)
演 習 1	テーマを「中学生の携帯電話所持について」と設定し、実際にアウトラインを作成した。(約15分)	「大学入試は必要か」を問いとして、実際にアウトラインを作成した。(約15分)
文 章	一文一義、短文、ねじれ文への注意、曖昧表現の排除の4原則について、例文を取り上げながら説明した。(約15分)	一文一義、短文、ねじれ文への注意、曖昧表現の排除の4原則について、例文を取り上げながら説明した。(約15分)
演 習 2	講義の理解を深めるため、文章に関する問題(3問)をその場で解いた。直後に解答例を配付し、自分の手で修正させた。(約20分)	作成したアウトラインシートをもとに800～1000字程度の文章を書いた。その際、800字程度のサンプル文を提示した。(約25分)

前期と後期の大きな違いは、アウトラインシートの改良である。前期アウトラインシートにおいては、提起した問題についてどのような考察をして結論を導くかという概観的な作業を求めた。これに対し、後期はレポートを構成する序論・本論・結論の3要素に沿って柱が立てられるよう、項目を細分化して提供した。また、後期はアウトラインをつくらせるだけでなく、実際に講義時間中、アウトラインシートをもとに800～1200字程度の短い文章を書くことを求めた。文章作成の時間を捻出するため、前期に行った文章に関する演習問題は取りやめた。

## (3) 教材開発

初の試みとなった本年度は、講義に合わせオリジナルテキスト『レポートづくりの基本』を作成し、学生に配布した。作成にあたっては、①講義内容を概観するだけでなく発展させられる②実際のレポートや論文作成に役立てられる、という二つの点を念頭に進めた。学生が気軽に手に取れるように、A5判のコンパクトな形とした。また、掲載項目を厳選し必要最小限に抑えたために、総ページ数も前期が19ページ、体裁を整え巻末にアウトラインシートを入れるなどの改訂を加えた後期も27ページに抑えた。

内容は講義同様、「レポートの構成」と「わかりやすい文章の作成」の2部立てとした。「レポートの構成」では、序論・本論・結論の基本的な構成のほか、構想から執筆に至る作成の手順に1項目をさいた。また、文献引用に際しての注意事項を掲げ、インターネットからのコピーペーストといった安易な文献盗用・剽窃に対する注意を喚起した。一方、「わかりやすい文章作成」では、文章作成の要点を「一文一義」「短文」「主述の統一性」「曖昧表現の排除」の4点に絞り、例文を示しながら説明を試みた。

### 3. アンケート結果と考察

調査アイテム：所属学部、アンケート回答 (item1 ~ 5)、感想などの自由筆記

本アンケート調査の分析は回答者の属性を、所属学部、受講前の文章作成能力に関する自己評価 (項目 1) の2点とし、「レポートの構成」「文章の書き方」各個別項目の難易度 (項目 4、5) と講義全体の難易度 (項目 3)、「参考になったか」 (項目 2) といった質問に対する総合評価で構成されている。

#### (1) 結果

689名の有効回答があった。所属学部の内訳は下表の通りであった<sup>1</sup>。

学部

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	1 工学部	220	31.9	32.1	32.1
	2 教育学部	125	18.1	18.2	50.3
	3 理学部	78	11.3	11.4	61.7
	4 文学部	60	8.7	8.7	70.4
	5 医学部	99	14.4	14.4	84.8
	6 法学部	72	10.4	10.5	95.3
	7 薬学部	32	4.6	4.7	100.0
	合計	686	99.6	100.0	
欠損値	システム欠損値	3	.4		
合計		689	100.0		

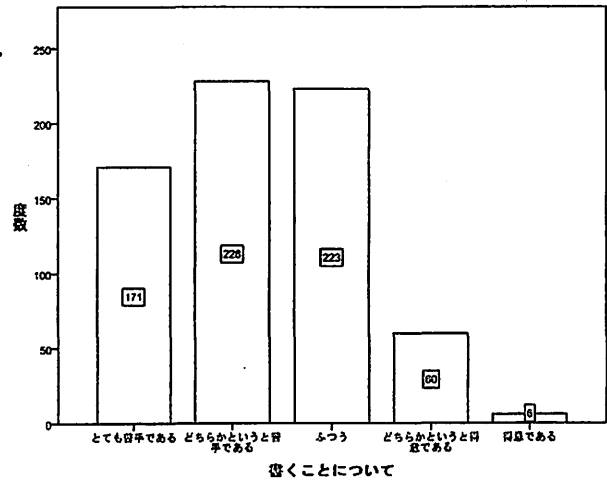
<sup>1</sup> 前期、後期のアンケート内容は同じであるが、講義内容の違いを考慮して、アンケート結果は、前期のみを表示している。

各項目の結果は次の通りである。

(項目1)

「あなたは日ごろ文章を書くことに苦手感がありますか」

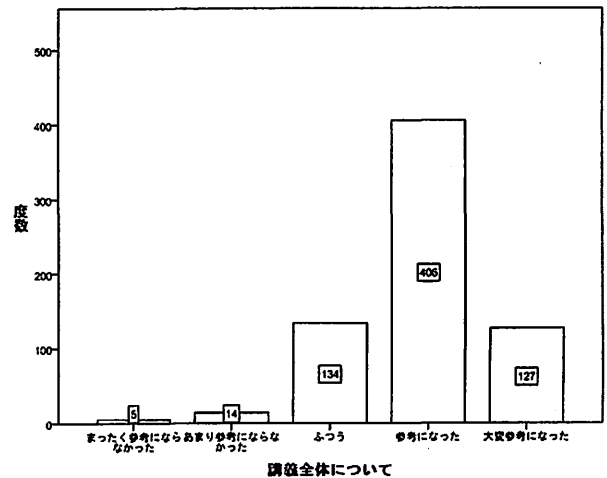
1. 「とても苦手である」
2. 「どちらかというと苦手である」
3. 「ふつう」
4. 「どちらかというと得意である」
5. 「得意である」



(項目2)

「今後、あなたがレポートを作成する上で参考になりましたか」

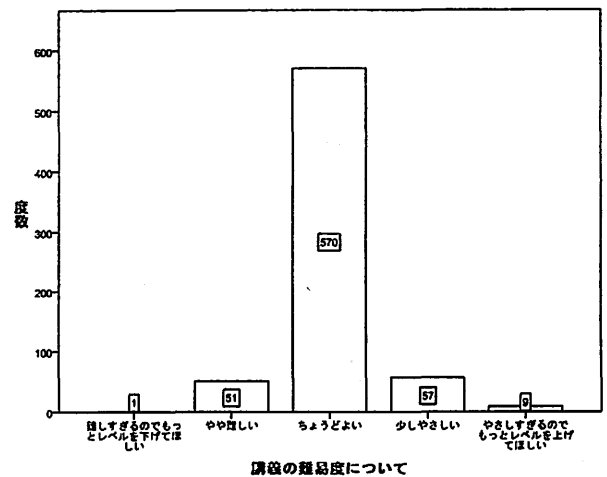
1. 「まったく参考にならなかった」
2. 「あまり参考にならなかった」
3. 「ふつう」
4. 「参考になった」
5. 「大変参考になった」



(項目3)

「講義全体の難易度はいかがでしたか」

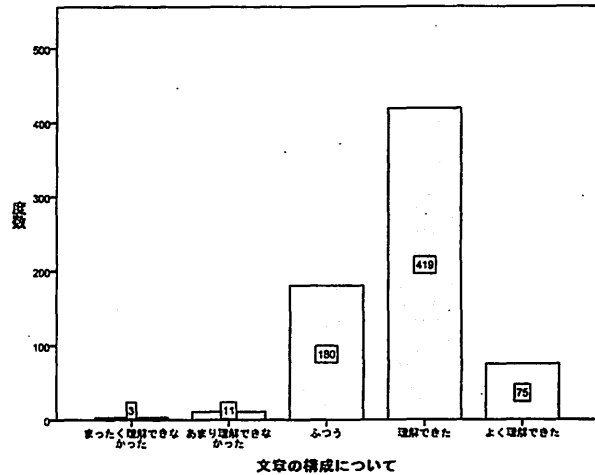
1. 「難しすぎるのもっとレベルを下げてほしい」
2. 「ややむずかしい」
3. 「ちょうどよい」
4. 「少しやさしい」
5. 「やさしすぎるので、もっとレベルを上げてほしい」



(項目 4)

「講義内容『レポートの構成について』」

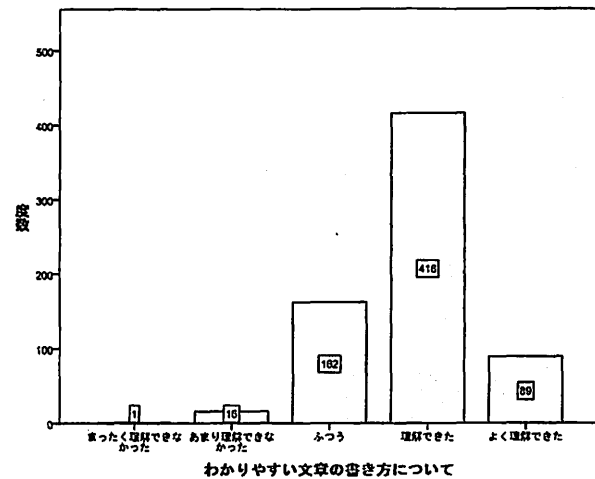
1. 「まったく理解できなかった」
2. 「あまり理解できなかった」
3. 「ふつう」
4. 「理解できた」
5. 「よく理解できた」



(項目 5)

「講義内容『わかりやすい文章の書き方について』」

1. 「まったく理解できなかった」
2. 「あまり理解できなかった」
3. 「ふつう」
4. 「理解できた」
5. 「よく理解できた」



	文章作成に関する主観的評価											
	とても苦手		やや苦手		普通		やや得意		得意		合計	
	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%
工学部	62	28.2	77	35.0	69	31.4	11	5.0	1	.5	220	100.0
教育学部	29	23.4	41	33.1	43	34.7	10	8.1	1	.8	124	100.0
理学部	27	34.6	26	33.3	18	23.1	7	9.0	0	.0	78	100.0
文学部	5	8.3	16	26.7	25	41.7	12	20.0	2	3.3	60	100.0
医学部	25	25.3	34	34.3	29	29.3	9	9.1	2	2.0	99	100.0
法学部	10	13.9	25	34.7	26	36.1	11	15.3	0	.0	72	100.0
薬学部	11	34.4	8	25.0	13	40.6	0	.0	0	.0	32	100.0
合計	169	24.7	227	33.1	223	32.6	60	8.8	6	.9	685	100.0

学部全体において「とても苦手」、「やや苦手」と回答した割合は57.8%を占め6割近くの学生は何らかの苦手意識を有している。文学、法学部では「普通」以上の占める割合は65%、51.4%であり、他学部よりも苦手の占める割合は小さいと言える。

	講義全体への評価											
	参考にならず		あまり参考にならず		普通		参考になった		大変参考になった		合計	
	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%
苦手	1	.3	11	2.8	71	17.8	237	59.5	78	19.6	398	100.0
苦手ではない	4	1.4	3	1.0	63	21.9	169	58.7	49	17.0	288	100.0
合計	5	.7	14	2.0	134	19.5	406	59.2	127	18.5	686	100.0

※普通からどちらかという得意・得意を、苦手でないと分類

文書作成に対する主観評価を苦手・非苦手に区分し講義全体への評価を集計したところでは、「参考になった」以上の回答は77.7%を占めた。主観的回答ではあるが一定の効果は得られていると解釈されている。苦手と評価していた群において「参考になった」と評価する割合は若干高いが、ほぼ同様の効果が得られていると考えられる。

		講義に対する難易度					合計
		難	やや難	ちょうど良い	やや易	易	
苦手	度数	1	38	337	20	3	399
	%	.3%	9.5%	84.5%	5.0%	.8%	100.0%
苦手ではない	度数	0	13	233	37	6	289
	%	.0%	4.5%	80.6%	12.8%	2.1%	100.0%
合計	度数	1	51	570	57	9	688
	%	.1%	7.4%	82.8%	8.3%	1.3%	100.0%

苦手と感じる群において「やや難」の回答が9.5%と、苦手でない群の4.5%を上回った。また、苦手でない群における「やや易」が12.8%と苦手である群を上回った。

## (2) 考察と今後の課題

アンケートから分かるように、6割近くの学生が文章を書くことに対して苦手意識を持っている。これは大学における初年次ライティング指導の要諦が、いかに苦手意識を払拭するかという点にあることをうかがわせる結果である。そのためには、アカデミック・ライティングとはきわめてシステムチックなものであり、仕組みさえ覚えれば誰にでも書けるものであるということを徹底して教えることが必要である。

今回の講義およびテキストでもレポートや論文作成におけるシステムチックな部分を強調したつもりだが、一方で学生の側の論理的思考の欠如という問題も見えてきた。学生が提出した文章からは、確かに講義において示した序論・本論・結論というおおまかな構成を取り込もうとする努力は見られる。しかし、根拠のない意見をベースに論を進めたり、事実誤認に基づいて意見表明を試みたりするなど、大半の文章は「論理的」という点では合格点には程遠いものであった。

論理性の欠如は、初年次生のみならず学部生全体の問題でもあるようだ。本年度、ライティング・センター準備室では卒業論文支援を行い、8人の学部4年生に助言を与えた。最初に持ち込まれた文章は、いずれも初年次生と同様の傾向が見られた。

こうした学生の傾向にはいくつかの原因が考えられる。ひとつは、小学、中学、高校を通して、一貫し

た論理的文章の指導が行われていないということである。これは、大学においても同様の傾向があると思われる。学生は書き方もわからないままにレポートや論文の提出を求められているというのが現状ではないだろうか。

身の回りのさまざまな事象に対する関心の薄さも原因のひとつといえよう。短時間での演習ということを考え、後期は入学したての学生にとり最も身近な問題である大学入試を取り上げた。具体的には、「大学入試は必要か」という問いかけへの答えを文章として要求した。結果は前述のとおりであるが、一方で、ライティング指導が単に「書く」という技術のみならず、社会に対する関心、情報分析力、コミュニケーションといった総合的な能力を高めていく可能性を秘めているということを感じた。

文章作成においてほとんどの学生が頭を悩ませたのは、書き出しをどうするか、という点であったようだ。アカデミック・ライティングを含む実用文における書き出しは、読み手の注意を真っ先に喚起するものとして非常に重要視されている。英文ライティングの教科書の中には、最初の書き出しに1項目を設け、主題文に応じていくつかのパターンを例示したものもある (McElroy, J. 1997, 40-45)。今後の指導およびテキスト改訂に際しては、検討すべき項目であろう。

## おわりに

今回講義は全学の初年時生を対象に行ったという点で意義がある。講義自体は1回(90分)限りの単発であったが、学生の「書く」行為、「考える」行為への動機づけになりうる。入門的なライティング指導を受けた学生に対し、ライティングへの継続的な関心を持たせるためには、いつでも誰でも指導が受けられるライティング・センターの充実が必要になってくるだろう。もちろん、来年度以降、初年次講義とテキスト内容をさらに充実させていかななくてはならないことは言を待たない。

## 参考文献

- 木下是雄 (1994), レポートの組み立て方. 筑摩書房.
- 佐渡島紗織 (2005), 大学における「書くこと」の支援—早稲田大学国際教養学部における「ライティング・センター」の発足. 全国大学国語教育学会発表要旨集, 109, 193-196.
- 佐渡島紗織 (2006), 早稲田大学国際教養学部に発足したライティング・センターの運営と指導—国語教育の他分野への貢献『早稲田大学国語教育研究』, 26, 82-94.
- 佐渡島紗織 (2008), これから研究を書く人のためのガイドブック ライティングの挑戦 15 週間. ひつじ書房.
- 鈴木宏昭編 (2009), 学びあいが生みだす書く力 大学におけるレポートライティング教育の試み. 丸善プラネット.
- McElroy, J. (1997), *Write Ahead – A process approach to academic writing*. Tokyo: Macmillan Language house.
- Meyer, E. & Louise, Z. S., (1987), *The Practical Tutor*. New York, NY: Oxford University Press, 43-67.
- North, S. M., (1984), The Idea of a writing center. *College English*, 46 (5), 433-446.